

「近代日本における仏教主義学校の展開」

駒沢女子大学 皆川 義孝

【キーワード】近代日本 仏教主義学校 僧堂教育

本報告では、仏教の社会的実践について、近代日本における仏教主義学校の展開として、特に曹洞宗立学校と近代社会との関わりについてみていきたい。明治8年(1875)以降、仏教各宗派でそれぞれの宗派独自の僧侶養成を目的とする宗立学校が設立された。宗立学校での仏教主義に基づく教育方針や活動は、学校の中にとどまるものではなく、近代社会に広がりを見せるものであった。中には、宗立学校での仏教主義の教育方針や活動に影響を受けた教育者によって設立された学校も存在した。

中村春二(1877-1924)は、大正デモクラシー期に展開した大正自由教育のパイオニアとして知られる。中村が主張した教育方針が「僧堂教育」であった。これは明治以降の西洋の影響を受けた画一的で、知識詰込型の教育により生徒の自発的精神を失わせていることへの批判から生まれたものであった。中村は、「僧堂教育」の方針に基づき、明治39年(1906)、自宅に私塾の成蹊園を創設し、明治45年(1912)には成蹊実務学校を開校する。これが現在の成蹊学園の源泉となっていくのである。

中村の主張した「僧堂教育」は、西欧リベラリズムから導かれたものではなく、日本仏教の曹洞禅から導かれた教育との見方がある。中村と曹洞宗との交流は、宗立学校の曹洞第一中学林(現世田谷学園)・曹洞宗大学(現駒澤大学)での講師としての経験や、大本山永平寺・大本山總持寺などでの参禅などに見る事ができ、彼を曹洞宗の教えや修行生活に傾倒させていく。特に、中村は坐禅で自らを修めることにより内面を高めるという禅修行の方法を取り入れ、自らの学校では静座の坐禅である「凝念」、「断食」、生徒の精神力を培うため「心の力」を唱えさせ、身体を使う「作業」を重視した。さらに、『十牛図』をもとに、教師用の人間形成のための書として『悟り方圖解』を著している。中村の「僧堂教育」は禅の教えを巧みに教育に取り入れたもので、「僧堂教育」により、生徒の自奮自発の精神を養い、身中深くに潜む「真我」を導き出させようとしたのである。中村の教育方法は、その死後、成蹊学園主事兼成蹊中学校長をつとめた児玉九十(1888—1989)らによって創設された明星学苑(現学校法人明星学苑)にも広まっていく。このように、「僧堂教育」は曹洞宗との関わりが強いものであったといえる。

このように、中村春二の「僧堂教育」および学校事業は、大正期の日本の教育界における曹洞宗の禅の教えや実践であり、すなわち近代日本における仏教の社会的実践といえるのではないだろうか。今回、中村春二の「僧堂教育」をキーワードに、この教育方針がどのように形づくられ、さらにどのように実践されていたのかを探り、近代日本における仏教の社会的実践の一端をあきらかにしていきたい。